経験人数一人
彼氏一筋の私が
ＳＮＳ最強鬼畜調教師の
雌豚に自ら志願した話

犬文庫　０２８

この作品はフィクションです。
実在の人物・団体・事件等とは関係ありません。
また、登場人物は全員十八歳以上です。

登場人物

舞嶋美優奈(まいしま　みゆな)
本作の主人公。二十五歳。小さな医療機器メーカーに勤める。色白で細い。黒髪ショートヘアーの清楚女子。でも実際は…。

前田理樹(まえだ　りき)
美優奈の彼氏。大学時代の同期生。眼鏡で、男にしては小柄。小説家を志す。

リュウ
ＳＮＳのその手の界隈で有名な最強鬼畜調教師。

「…どうかな？」
「…うん……うん……上手く書けてると思うよ」
心配そうな彼氏の問いに、舞嶋美優奈は優しく答えた。
「ホント？」
身を乗り出してさらに訊いてくる彼に、原稿に目を落としたまま美優奈は続ける。彼が安心出来るように。
「うん…ホントだよ。ここの表現とか結構上手だと思うよ、普通に。あと、このラストの畳みかけなんかも爽快感あって良い感じ」
「マジか？はあ…よかったぁ」
「ふふふ」
ホッと安堵して、全身を脱力させた彼の仕草がおかしくて、美優奈はつい微笑みを浮かべてしまう。

一人暮らしの美優奈の部屋で、彼氏が書いた小説を美優奈が読み、率直な感想とアドバイスを伝える。そんな時間だった。彼氏の前田理樹は小説家を目指し、日々執筆活動に励んでいる。共に社会人で、お互いの仕事が終わってからにはなるが、恋人二人でのこうした寸評会はこれまで幾度となく行われてきた。

大学で同じ講義を受けていた縁で知り合った美優奈と理樹は、当時から二人とも文学好きで、よく小説の話で盛り上がっていた。最も理樹が目指すのは若者向けのエンターテイメント作家で、純文学好きの美優奈はそっち系のジャンルは実は不得手なのだが、文章全般に対する知識に関しては美優奈の方が秀でており、理樹は彼女のアドバイスをありがたく頂戴しているという訳だった。

「はぁ〜よかったぁ…美優奈先生のお墨付き

をもらえて」
理樹がズレた眼鏡を直しながら言う。
「そんなぁ…先生だなんて大袈裟だよ、理樹くん、うふふ♪…でも本当に、大分上達したと思うよ、理樹くんの文章。無駄がなくなって、滑らかになった印象」
「そうか。よし、じゃあこの作品。いよいよ自信を持って編集さんにぶつけてみるか」
以前新人賞に応募した理樹は、受賞して華々しくデビューとはならなかったものの、一定の実力を認められ、出版社の編集者から直々に指導してもらえる段階までには来ていたのだった。小説家になるという彼の大志は、決して夢物語ではないのである。
そういう訳で、最近の恋人としての二人の時間は、こうして理樹の夢のために費やされることもしばしばだった。だが美優奈は、それにつ

いて一切不服になど思ってはいなかった。古風でとても献身的な彼女である美優奈は、彼氏の夢のためならばどんな協力も惜しまない。むしろそれが彼女としての当然の務めだと、至極ナチュラルに思っていたのだった。

シンプルな黒髪ショートヘアーの彼女は、やや童顔で顔の各パーツにはっきりした特徴がなく印象薄く、全体的に地味な感は否めなかったが、それでも充分な美人といえた。そしてなによりその清楚なイメージは強力だ。なにか大所帯の清純派アイドルグループの端の方にでもいそうな女性である。気品があってたおやかで、彼氏思いでとても優しい。実際美優奈は理樹以外の異性とは付き合ったことがなく、男性経験も当然彼のみだった。

眼鏡の地味男であり、体格的にも小柄で貧相で、決して男として優れているとは言い難い理

樹からしてみても、何故こんな良い娘が自分と付き合ってくれているのか、ふと不思議になってしまうくらいだった。

そういう意味でも、なんとしても小説家になるという夢を叶えねばならなかった。デビューして、一廉の男になって、必ず美優奈を幸せにしてやらなければならない。大学時代から交際を始め、もう五年ほど経つ。理樹は当然彼女との結婚を見据えていた。

「…よし…じゃあ今度こそ、デビューだ！待っててくれよ、美優奈！」

「うん…ずっと…応援してるからね…理樹くん♪」

全幅の信頼と共に向けられた、野辺に咲く花のような可愛らしい微笑みに、理樹はこれ以上ない幸せを実感するのだった。

※※※

「うぅ…く…んん…あ…ああ…♥」

美優奈が、清楚そのものである美優奈が、とてもか細い声で鳴く。何度も何度も鳴く。その声に、その儚い表情に、理樹の劣情があさましくも刺激される。

理樹はさらに腰を激しく振る。

「はあ…み…美優奈！ああ、美優奈！好きだ！」

「はぅん！ああ…んん…ああっ♥理樹くん…わ…私も…私も…んっ」

甘い時間が流れていた。理樹の小説の寸評会に一段落着いた頃、二人はどちらからともなく肌を触れ合わせ寄り添い、やがて自然に美優奈のベッドで体を重ねていた。理樹は見た目の印

象とは異なる荒々しい動作で彼女を裸にひん剥いた。天使を思わせる細くしなやかな肢体と、それと矛盾するような二つの大きな白い胸を、理樹はおおいに堪能した。

理樹も美優奈以外に女性経験がなく、セックスが得意とは言えなかったが、こうして愚直に愛を確かめ合っているだけで、きっと彼女は満足してくれているはずだ。そんな確信があった。

「はあ…んん！ああ！」

「くっ…はあ…ああっ❤…ん…はあ…ん…あぁ…」

意識が半ばぼやけるような、まどろみの如き快楽の海に理樹は溺れた。ずっと、こうしていたいと思った。

※※※

事を終え、しばらくすると理樹は帰っていった。確かに明日も平日で、お互い社会人の二人には仕事が待っているのだが、別に泊まっていったっていいはずだった。だが美優奈の部屋は理樹の職場からやや遠く、朝はバタバタせずにしっかりと気持ちを整理してから出社したいと言う彼は、休みの前日を除けば彼女の部屋に泊まっていくことはまずなかった。真面目といえば聞こえはいいが、理樹にはそういった神経質で若干融通の利かないところがあった。

「……」

彼氏が去り、一人になった部屋で、美優奈はローテーブルの前に腰を下ろし、手に持ったスマホをじっと見つめていた。もし理樹が忘れ物でも取りに戻ってきて、その姿を目撃したなら

ば、違和感を覚えたかもしれない。
美優奈のその姿に、ついさっきまであんなに激しく愛し合っていた余韻を、あの甘美な時間の余韻を、理樹はなに一つ見つけられなかっただろうから…。
「……」
彼女がそれほど熱心に見つめているのは、とある呟き系のＳＮＳだった。全ての投稿メッセージがフルオープンに公開され、アカウントを持たない人でもそれらを気軽に見ることが出来る、とてもシンプルでメジャーなＳＮＳ。投稿メッセージと共に画像や動画をアップすることも出来、非常に使いやすく、便利で、日本でも多くの人々が利用していた。
今、美優奈がじっと見ているアカウント。その最新の投稿メッセージはこれだった。
『ＤＭ送ってきた調教志望のドスケベ雌に、会

ってすぐいきなりチンポ恵んでやりました！』
そしてそのすぐ下に、動画が添付されている。
美優奈の目には、再生されたその動画が映っていた。
『ほぉおおお！お♥おおっ♥おお！ぬっほぉおお！のぉおおおおお♥♥♥』
『ぎゃはは！なんちゅう声で喘ぐんだよ！このスケベ女！獣かよお前は！おらおらおら！チンポ気持ち良いのか？俺のチンポが気持ち良いのかよ！この雌！おらおら！』
『はっ、はいぃいいい！うんのっほぉおお♥おお！ほぉおお！き、き、きもぢいぃいいい！ぉおお♥もうすんごぐきもぢいいでずぅうう！にゅっほぉぉお～♥』
『あはは！お前はなんだ！お前は俺のなんなんだ！大声で答えろ！』
『はあ！奴隷です！私は！はぁああん♥ご、ご、

ご主人様の奴隷ですっ！雌奴隷です！んんんっ！あぁあん♥性奴隷ですぅうう！』
『なはっ！今日初めて会ったのにもう奴隷になってんのかよ！すげえなお前！おらおら！』
『はぁあああん！ああ♥ぉおお♥だって！ああ！んんん！ああ♥だってずっとＳＮＳ見てて！ほぉおお！それで私！ご主人様の他の奴隷の人の調教見てずっと濡らしてて！ああっ！はぅん♥メールで調教もしていただいたし！はぁああん！だから私はご主人様の奴隷なんです！んんっ！絶対奴隷ですぅうう！ぬなあ！ああっ！だからもっともっと調教してください！滅茶苦茶に私を調教しまくってくださいご主人さまぁあああん♥』
『ひひひ！いいぜ！俺様のチンポで躾まくってやる！それそれそれそれぇえ！』
『ほぉおお♥おお♥おっ♥ああああっ！で

かいでかいでかいご主人様のチンポでっかぁあああい！はあぁん！ああっ！ご主人様大好きぃ～～♥♥♥♥』

「……ゴクッ」

それは、ラブホテルで全裸の男女がガッツリセックスしている動画だった。ベッドに四つん這いになった女性を、後ろから腰を掴んだ男性が乱暴に犯している。その様子が固定のカメラで横からはっきりと撮影されていた。黒髪短髪の男性と、カールのかかった綺麗な長い栗色の髪の女性。二人とも若い。結合部分と二人の顔には厳重にモザイクがかけられていたが、二人がセックスをしているということは疑いようのない、間違いなく、そういう類の動画だった。

確かにこのＳＮＳは規制が非常に緩く、この手の動画や画像にはちょっと探せばすぐに辿り着けるのでもはや珍しいものでもないのか

もしれないが、問題はなにより美優奈がそれを見ているということだった。耳が丁度全部隠れるくらいのシンプルで味気ない黒髪ショートヘアーの彼女は、見た目から内面からなにからなにまで絵に描いたような清楚そのもので、自ら望んでこういうものに触れようとすることなんてあるわけないし、もし万が一なにかの間違いで遭遇してしまっても、耳まで真っ赤にして目を固く閉じたちまちうずくまってしまう。そういう初心な女の子のはずだった。少なくとも彼氏の理樹はそう認識していた。

「……」

だが、その動画を見つめる美優奈は、若干赤くなった頬に仄かな昂揚をのぼらせながらも、羞恥で目を逸らしたりしそうな様子はまるで見られなかった。堂々とした揺るぎない視線を、その他人のセックス動画に向けている。完全に、

自分の意思で…。
「……はあ…ん…ゴクッ」
さらに美優奈は、その動画を最後まで見終えると、別の人のアカウントへと移動する。そこにも似たような投稿メッセージがあがっている。
『奴隷として飼っている人妻を、旦那の仕事中に調教ファック♪ついにここまで躾ましたよ(笑)』
今度も同じようにセックス動画が連なっていた。やはりラブホテルと思しき場所で、チャラチャラした感じの若い男性(声のみでその姿は映らない)が、ぽっちゃりしただらしない体型の四十歳前後の女性を正常位で犯していた。男性は手に持ったスマホで、自らに蹂躙される裸の女性の姿をバッチリ撮影している。女性の顔は、先程の動画同様モザイクで固く隠蔽され

ていた。
『にひひ！いずみちゃぁ～～ん♪いずみちゃんは今、なにをしてるのかなぁ～？』
『はぁあああん！ああ❤ぉおお❤セックス！セックスです！はあ！ぉおお！いずみは今！ああ！ご主人様とセックスしてます！はあ！ぉおお！んん❤自分より二十も若いご主人様と！ぉおお❤旦那の仕事中にセックスしています！セックスを致しておりますぅうう！んんっ！セックスしていただいてますぅう！んんん！のわぁあん❤チンポ挿れていただいてますぅううう！』
『にゃは！うりうり！チンポうりうりうり！なんでそんなことになったのかな？真面目な専業主婦だったいずみちゃんが、どういう経緯で旦那の仕事中に浮気パコパコしちゃうような最低不良人妻になっちゃったのかな？にひ

ひ！このスマホ見てちゃんと説明してみよう！』

『はぁああん！いずみ！ああっ！ＳＮＳで雌奴隷調教でご活躍されてるご主人様に！ああっ！調教していただきたくて！はぁあん❤いずみも調教していただきたくて！なぁああん！ああ❤あぁあん❤ご主人様の奴隷にしていただきたくて！はあ❤はあ！だから人妻だけどこちらからご主人様にＳＮＳでコンタクト取って！ああ！それでお会いしていただいてその日の内にすぐパンツ下ろしてお股開いてご主人様にセックスしていただいて！ああっ！それで今日まで何回も何回も調教していただきましたぁああああ！いっぱい調教セックスしていただきましたぁああああ！ああっ！うんなぁああああ❤❤❤』

『あはは！じゃあいずみちゃんはもう旦那の

ものじゃなくて僕のものだよね？そうだよね？』

『はああっ！はいいいいい！その通りです！全く仰る通りですぅう！いずみは！ああ！もう完全にご主人様のものです！いずみの心も体もご主人様の所有物ですぅうう！ああ❤きゃあん❤はあ！いずみはもう旦那のものではありませぇえええん！』

『じゃあそれを旦那に言え！このスマホ見て！スマホの向こうで旦那が本当に見てると思って旦那に向かって大声ではっきりと言え！さあいけ！ドスケベチンポ大好き奴隷人妻いずみちゃん…GO～～(笑)♪』

『ああっ！んん！あなた！あなた！ああ！ごめんなさい！いずみ！いずみ！はあ❤もうあなたのものではありましぇ～～ん！はあ！ほぉお！いずみは！もうご主人様のものです！

あなたより二十も年下の若くて超カッコイイご主人様のものなんです！はあ！ああっ♥いずみの心も体も、ああっ♥おっぱいもオマンコも！はぁあん♥ぜ～～んぶ！ああっ！大大大大だぁ～～い好きなご主人様のものなんですぅ～～♥ああ！あなたごめんなさい！本当にごめんなさい！いずみ！今日まで不倫セックスしまくってきました！不倫調教されまくってきました！はあ！いずみは！いずみは！ご主人様のチンポが大好きですっ！はあ！ああ♥あなた、本当にごめんなさぁ～～い♥』

『あはは！すげえ！この奴隷マジなんでもするじゃん(笑)♪ウケる！それそれそれ！』

『はあ！あぁああん♥んんっ！ああ♥ご主人さまぁ～～♥』

「……」

二つの動画はそれぞれ別の人物によるアカ

ウントで、動画に登場するのも完全な別人だが、両者には明確な共通点があった。男性が主人、女性がその従者のようなかなり偏った関係性にあり、まるで女性が男性の性的な奴隷のような存在に見受けられるという点だった。

このようにして、平伏させかしずかせ、思いのままに調教したいわば雌奴隷を、自らのアカウント上で晒す男性が、このＳＮＳには多数存在した。ＳＮＳの必然としてそうした共通の嗜好を持つ人達は交流を重ね互いに強く結びつき、一つの界隈を形成するに至っていた。普通の人には知りえないＳＮＳの奥深くで、そんな歪な世界が確かに展開していたのである。

多くの人が驚くであろうことは、この界隈では、そうした男性に調教される雌奴隷になることを自ら望む女性が、信じられないほどに大勢存在するということだった。調教師を自称する

男性がわざわざ探しに行かなくとも、調教志願、奴隷志願の女性が向こうから続々とＤＭを送ってくるのだ。そして簡単に目の前に現れ、簡単にパンツを下ろし、簡単に股を開き、簡単にチンポを挿入されることを許し、あっという間に新たな雌奴隷が誕生する。調教動画はすぐに公開され、それが多くの人に互いに影響を与え、界隈は恐るべき勢いで男性に無惨に調教される女性を生み続けていくという寸法だった。

その手の男女の関係性の問題にやたらとうるさいこのご時世に、大喜びで自ら男性の奴隷になりたいという女性が、男性に支配され蹂躙されたいという女性が、こんなにも存在するのだった。信じ難いことだが、それが現実なのだった。

「……」

手の中のスマホを操作し、美優奈はさらに別

の人物のアカウントへと飛ぶ。その動作にも表情にも、加速する気分の高まりが透けて見えた。

それは、リュウと名乗る男性のアカウントだった。自称最強鬼畜調教師。この界隈では一目置かれた、いや、もはや神とまで崇められるほどの存在だった。男性ファンは逐一公開される彼の調教の過程をまだかまだかと楽しみにし、自ら彼の奴隷に志願して犯されに来る女性はひっきりなしで後を絶たない。色黒マッチョの短い金髪で、両腕には禍々しいド派手なタトゥー。見た目の印象通りのガラの悪いチンピラの如き男だった。年齢は三十前後だろうか。そして、彼は調教の動画等の一部をＳＮＳで無料公開し、その完全版を有料で販売していた。この界隈で大人気の彼は、それで生計を立てているらしいのだった。

本当に、プロの調教師なのである…。

『雌奴隷・木下晴子のド下劣調教・初日その四』
「はあ…ああ…ゴクッ」
どこからどう見ても真面目で清純っぽい黒髪ショートの美優奈は、熱い吐息を漏らしながら、彼の最新動画を再生する。
『ほぉおおおおお！ぉおおおお！ぉおお！おお！おお！ぬっほぉおおおおお！おお！おおお！うんにょっほぉおおおおお！』
「はあ！ああ！す…すご…」
美優奈は思わず声をあげてしまう。小さなスマホの画面から視界に飛び込んできたのは、例によってラブホテルらしき場所で、彼女と同じくらいの歳の黒髪ロングの全裸の若い女性が、同じく裸のリュウに立ちバックで後ろから思い切り犯されている光景だった。それが女性の体の真正面に固定されたカメラでしっかりと撮影されている。筋骨隆々とした褐色の逞しい

肉体のリュウは驚くべき勢いで前後に腰を振り、女性の股間を滅茶苦茶に突きまくっていた。そのあまりの激しさに、女性は要領を得ない獣の如き不気味な嬌声を張り上げ、圧倒的な快楽で表情をみっともないほどとろとろに崩壊させていた。

その女性として恥ずかしすぎる無惨なアヘ顔は、カメラから近い距離で克明に捉えられ、美優奈のスマホ画面にまざまざと映し出されていた。そう、前の二つの動画とは異なり、この動画には、一切モザイクが施されていなかったのである。女性の顔もリュウの顔も、生で遮二無二摩擦し合う二つの淫猥な性器も、なにもかも丸出しで描き出されている。これはリュウの流儀だった。この界隈では普段の社会生活を守るために個人情報は隠し、動画や画像の顔面にはモザイクをかけるのが通例だったが、リュ

ウは調教を志願してきた女性の顔面も名前も全て平気で公開した。剥き出しの素顔で調教され、獣と化して激しく犯される女性のありのままの姿を、その本名と共にＳＮＳから全世界へとなんら躊躇わず垂れ流した。彼が鬼畜調教師を名乗る所以の一つである。

そしてこの女性は、いや、彼女だけでなく彼に自ら調教志願のＤＭを送る全ての女性たちは、それを全て覚悟の上で彼の奴隷になっているのだった。すっぽんぽんになって、いやらしすぎる調教を受ける自分の姿が、ズコバコセックスされまくる自分の姿が、無数の人たちに見られ、知り合いや友人や家族にさえバレてしまうかもしれないことをわかった上で。自分の生活が、自分の人生が、滅茶苦茶になってしまうことを、重々承知した上で…。

『ほぉおおおお！おおお！おおおお！ぬっほ

おおおおお！ああ！あ！あ！あ！あ！あ！あ！あ！あ！あ！ぎんもぢぃいいいいいいいい！！！！』

カメラを真っ直ぐに見据え、淫らすぎる素顔を晒して迷いのない喜悦の叫びを堂々とあげるその若い女性。リュウのチンポに滅茶苦茶に突かれまくり、これ以上ないほどあさましすぎる、恥ずかしすぎる姿を晒しているというのに、それをなんら隠そうとしないその女性。彼女のその姿に、その現実に、美優奈は圧倒されずにはいられない。

「はあ…んん…ゴクッ」

飲み込んだ唾が、美優奈の喉をゆっくりと下っていく…。

『おら！呑気に喘いでばっかりしてねえで！カメラ見て自分が何者なのか自己紹介しねえか！おらおらおらおら！ほらいけ！』

苛烈すぎる腰の躍動を少しも緩めることな

く、リュウがとてもぞんざいな調子で女性に命令する。彼はその見た目のイメージ通り、口が悪くデリカシーに欠けた、粗暴極まりない男だった。

『ほぉおおおおお！おお！おおお！ぬっほぉおおお！わっ！私は！ぉおお！ぶ…ぶ…ぶ…ぶたぁあ！ああ！豚ですっ！めっ！ぉおお！雌豚ですぅうう！うんぬぅうう！私！雌豚！ほぉおおお！ごっ！ご主人様のチンポがっ！ほぉおおおん！おおっ！チンポが大好物の雌豚ずぅうう！ふんぬぅうう！』

『豚なのか？てめえは豚なのか？ええっ！じゃあ豚らしくブーブー鳴けや！鳴いてみろや！みっともなくブーブー鳴き喚けやこのクソ豚がっ！』

『はあぁあ！ほぉおお！ぉおお！はいぃいい！んんっ！ぶっ！ぶぅうぶぅう！

ぶっひぃいいい！ぶひっ！ぶひっ！ぶひぶひぶっひぃっひぃいいい！ふごっ！ふごふごふごっ！ぶぅぶぅ！ぶっひぃいいいいいい！』

「ああ…ああ…んん…」

あまりの光景に、美優奈は感嘆の吐息を漏らさずにはいられない。その女性は醜い豚の鳴き真似を忠実に再現し、さらに声を発するだけでなく、みっともなく豚鼻まで鳴らしてみせたのだった。リュウは調教した奴隷を雌豚と呼び、奴隷自らにも雌豚を名乗らせることを常としていた。この女性はそれを知っていてやっているのである。主人に媚びるために…。

「ああ…んっ…ゴクッ」

豚になりきろうとする若い女性の卑しさ溢れる顔面が、スマホのディスプレイに明瞭に像を結ぶ。その顔は、その表情は、確実に美優奈の心を揺さぶる。

『ふっ、ホントに豚なんだな、てめえは。呆れるぜ。じゃあなんでてめえは豚になってんだよ？なんで、どういう経緯で俺の雌豚になったんだ？昨日までは普通の人間だったはずだろうが？なのになんで今雌豚になってんだ？ええっ！おらおら！この動画見てる人にわかるように説明しろやこのド畜生のゴミクソ豚！おらっ！そらそらそらっ！』

『くっひぃいいいいい！ほぉお！おお！ぶひっ！ぶひぃ！ぶっひぃいいい！はあ！私！んんっ！ぉお！私！私！ああっ！普段周りには隠してるけど！絶対に完全に隠してるけどぉ！ぉおお！へ…変態…んんっ！変態なんですぅうう！ぉおおお！ドMの変態なんですぅうううう！超ドMの超変態なんですぅうう！のおおおぉおおお！ああっ！だからご主人様に調教していただきだくでぇええ！どう

しても調教していただきたくてもうたまんなくっでぇえぇ！にょっほぉおおお！ぉお！調教していただくために！ああっ！のっほぉおお！最強最高鬼畜調教していただくために！ああっ！自分からご主人様にＤＭしましたぁあああ！私を調教してくださいって志願しましたぁあああ！めっちゃ媚びた！媚びて媚びて媚びまくったＤＭ送りましたぁあああ！はあっ！ああっ！そんでまんまと呼び出されてすぐ会いにいって！ほぉおお！ラブホテルにひょこひょこついていってご主人様の目の前ですぐ全裸になってぇえぇ！ああ！初対面の人の前ですっぽんぽんになってぇえぇ！はあ！そんで今！ついさっき会ったばかりなのにもうセックスしてますぅううう！んんん！会ってすぐご主人様にセックスしていただいてますぅううう！んん！ああっ！わかっててて

きました！すぐセックスされるってわかってきました！私！自分からセックスしにきました！自分からパコられにきました！会ってすぐセックスされにきました！会ってすぐパコられにきましたぁああ！それをＳＮＳで公開されることもわかっててきましたぁああ！ああ！セックスシーン公開されることわかってて私！セックスしにきましたぁああ！ぬっなぁあああああああ！』

「はあ…んん…ああ…」

自分と同じような黒髪の女性。似たような雰囲気と属性を持つ、大人しそうな地味な女性。その質素な外見から、美優奈は直感的に彼女にシンパシーを覚える部分があった。そんな彼女の口から発せられる、狂気的なまでに淫らな性的放蕩の告白。決して許されない、いやらしすぎる内面の告白。美優奈の鼓動が早鐘を打ち始

める。
『はああ！そんで！ぉおおお！ぬっほぉおおお！セックス以外にも！ぉおおお！パコ以外にも！ほぉお！ほぅほぉ！おおっ！いっぱい調教していただいて！ああっ！色んな調教でいっぱい躾ていただいて！躾まくっていただいてぇえ！ぉおお！んんっ！私！念願のご主人様の雌豚になれました！ぉおおお！ついにご主人様の雌豚にしていただきましだぁああ！ああっ！ほぉおお！んん！幸せ！わだし！うぬぅうう！ご主人様の雌豚にしていただいで！ぉおお！今！もうすんごぐしあわぜでずぅうう！うんぬぅうう！』
『ひひ！とんでもねえ奴だな、この豚は！おい、てめえ今、彼氏いんのか？正直に答えろ！』
『います！ぉおお！私！今！普通に彼氏います！』

とんでもないことを、その女性はあっけらかんと即答する。

『彼氏いんのに俺に調教されにきたのかよ！ええっ！彼氏いんのに俺にパコられにきたのかよ！ええっ！こら！』

『はいっ！その通りですぅう！んんん！私！彼氏いるのにご主人様に調教されにきました！ああ！彼氏いるのに平気でご主人様にパコられにきました！はあっ！ほぉおお！そんでパコられました！まんまとパコられました！粛々とパコられました！彼氏いんのにご主人様に会ってすぐパコられました！はあっ！ほぉおおお！おおお！私はそんな最低変態ドスケベ女なんですっ！んんっ！チンポ超好き女ですぅう！ほぉおお！だからご主人様！ぉおお！もっとこの雌豚の最低スケベマンコをお仕置きしてください！躾てくださ

い！ぉおお！ほぉおお！お願いしますぅううう！にゅっふぅううううう！』

『くく、マジ最低だな、この雌豚。いいだろう！俺の最強チンポで躾まくってやらあ！おらおらおらおらおらうらうらうらうらうらうらうらうらうらっっっ！』

立ちバックで背後からその女性を犯しまくるリュウの腰の動きが、俄然激しさを増す。女性の腰を掴んだ両手にグッと力を込め、まるで叩きつけるような乱暴で攻撃的なピストンを連発させる。

『おらおらおらおらおらおらおら！雌豚の腐れマンコおらおらおらおらおらおらおらっ！』

『ぐっひぃいいいいい！にょっほぉおおおおおお！おお！おおお！ぎだ！ぎたぎたぎだぎだぎだぁあああ！すんごいのぎだぁあああ！にゃっはぁあああああ！にゅっほぉおおお！』

『おら！カメラ見て彼氏に向かって謝らねえか！この動画ＳＮＳで余裕で公開すんだぞ！お前の彼氏だって見るかもしんねえ！だから謝らなきゃいけねえだろうがよ！ちゃんと謝っとけ！心込めて！誠心誠意謝罪しとけやこの最低マンコ雌豚！ははっ！おらいけっ！』

『はぁあああ！ほぉおお！ごっ…ごめん…ほおおおお！ごめんなさいっ！ああっ！大介くんごめんなさぁあああい！大介くんの彼女の晴子！ほぉおおお！今！大介くん以外の男に！ぉお！大介くんの知らない男に！ぉおおお！調教されてますぅううう！ぉおお！大介くんの大切な彼女！ぉおおお！大切な彼女の晴子！ぉおおぉおおお！鬼畜調教されてますぅううう！んんん！晴子！他の男に滅茶苦茶に犯されてます！ぉおお！晴子！会ってすぐパコられてますぅうう！晴子のマンコ！今！他

の男に滅茶苦茶にされてますぅうう！ほぉお！そんでその模様をＳＮＳで公開されちゃってますぅうう！うんぬぅうう！ほぉお！全部晴子自らの意思ですぅうう！ぬぅうう！晴子！自ら望んで調教されてます！自ら望んで喜んで会ってすぐパコられてます！自らの意思でマンコ滅茶苦茶に犯されてますぅうう！はあっ！ほぉおお！それもこれも！晴子が変態だからですぅうう！うんぬぅうう！晴子が雌豚だからですぅうう！ほぉおお！のぉおおお！大介くん！ぉおお！本当にごめんなさい！晴子！変態の雌豚で本当にごめんなさぁあああい！ほぉおお！ああっ！ぶ…ぶひぶひぶっひぃいい！はぁあっ！ぶっ！ぶぅぶぅぶひぃぶひぃぶっひぃいい！ああ！だ、大介くぅ～～ん♪だ、大介くんの彼女はチンポ大好き超変態雌豚なのだぶひぶひ

ぶひぶひぶひぶっっっひぃいいいいいいいい！！！！』
「ああ！はあ！んんっ！」
その映像を見つめ続ける美優奈の喘ぎも激しくなる。彼氏のいる女性に、彼氏がいるということにちなんだ独特のインモラルな責めを展開するのも、彼の調教の特色であり醍醐味だった。カメラに顔の正面を向け、とんでもないことを叫び続けるその女性に、美優奈は心底圧倒されていた。本当に彼氏に見られるかもしれないというのに、彼女はカメラ目線で堂々と彼氏にメッセージを送っている。一体なにを考えているのだろうか。同じ彼氏を持つ女性として、信じ難いものがあった。あまりに現実離れした背徳感に、頭がクラクラする思いだった。
『マジ最低のゴミ雌豚だなっ！おら！種付けしてやらぁ！種付け調教だ！おらおらおらおら！はあ！うらうらうらうらうらうらうらうら！

…うっらぁあああ！！！！』

『ほぉおお！ぉおおお！ぬっぐぅうう！んん！にょぉおお♥ほぉお♥おっ♥おっ♥んんっ♥ぬ…くっひぃいいいいいいいいいい♥♥♥』

リュウが立ちバックピストンの動きを一段と加速させ、そしてそのまま女性の膣内に躊躇うことなく射精した。女性はひと際狂気じみた様子で嬌声を迸らせると、中出しと同時に全身をぶるぶるっと痙攣させ、やがてガクッとうなだれて動かなくなった。

二人のセックスはそこまでだった。だが、動画はまだ終わりではなかった。編集によって場面が飛び、パッと画面が切り替わった。そうして、美優奈の手の中の小さなスマホ画面に、とんでもない映像が描きだされたのである。

それは、その女性の顔面のドアップだった。だが色々と様子がおかしい。色々と、常軌を逸

していた。まず、黒髪ロングヘアーの彼女の両頬に、赤のマジックで昔の漫画でよく見たようなアホっぽい渦巻きが描かれていた。加えて鼻の下には、黒いマジックで書かれた鼻毛がたくさん。全部で二十本ほどもあろうか。同じ感じで口の周りと顎には、ベタ塗りの黒で大工のおじさん的な濃い濃い男の髭の装飾。さらに額にはやはり黒で『チンポ命』の文字。嫁入り前の若い女性が、顔中いっぱいにバカ丸出しのあまりに屈辱的な落書きを施されていたのだった。それは、いかに奴隷とはいえ、さすがにひどすぎる仕打ちだといえた。

さらに首元。彼女はその首に短く細い紐状のものを括りつけられていたのだが、そこにカメラに正面向いて映るようにして、運転免許証が吊り下げられていたのだった。正真正銘、彼女の本物の免許証で間違いなかった。本名と生年

月日と住所が、そこには、はっきりと記されてあった。普段の社会生活を営む澄ました素顔の写真も、明瞭に映っている。例によって、モザイクなどない。こんな重要極まる個人情報が、誰でも見られるＳＮＳで、ダダ洩れにされていたのだ。

「……ゴクッ」

『…よし、やれ』

映像の外から、鋭く、冷たい、リュウの声。

すると彼女は、動きだす。

『はぁ～～い♪あたくしのお名前は～木下晴子どぇ～～す♪本名どぇ～～す♪こちらの運転免許証がその証拠でごじゃりまするぅ～～♪普段は普通の真面目なＯＬやってる木下晴子は～ご主人様のご命令でぇ～～♪ただいまこんなアホなことやっておりみゃぁ～～す♪あはっ♪この免許証の普段の真面目なあたく